住吉具慶本洛中洛外図作品群の描写内容と特徴

――江戸時代中期の洛中洛外図屏風の研究――

大塚活美

〔抄　録〕

本稿は、江戸時代中期に住吉派二代目の住吉具慶が制作した洛中洛外図屏風及び類似の図柄の作品一〇点を取り上げ、描かれた図柄を絵画的・地理的・歴史的・民俗的視点から比較することにより、各作品の特徴と相互の関係、全体を通して見た住吉具慶本作品群の特徴を明らかにすることを目的とする。住吉具慶の落款をもつ作品は、描かれた内容に独創性が認められ、画風全体の雰囲気から他とは異なることから、具慶のオリジナル作と考えられる。これに類似する図柄のものは、それを元に制作された作品群で、全体の構図や年中行事の配置などから二～三の小群に別れる。寺社名等の表記からは当時の地図や出版物を参考に作られた可能性が窺われる。関東に見られる一人立ち獅子舞を描くことから、東日本で制作・需要されたと考えられる。これらのことを通して、住吉具慶本洛中洛外図作品群は、江戸時代中期に数多く制作された洛中洛外図の中の一群であり、住吉派の伝統である年中行事等の風俗描写に特徴を持ち、江戸において制作された作品だと推測した。

キーワード　洛中洛外図、住吉具慶、年中行事、一人立ち獅子舞

序章

第一節　研究の目的

本稿では、江戸時代中期に住吉具慶が制作したとされる洛中洛外図の作品及び類似の作品を取り上げ、その描写内容を絵画的・地理的・歴史的・民俗的な視点から分析し、この作品群の特徴及び作品相互の関係を明らかにするとともに、この作品群を洛中洛外図全体の中で位置づけることを研究の目的とする。

洛中洛外図は、京都とその周辺地域を六曲一双の屏風に描く絵画である。室町時代後期の歴博甲本を嚆矢として一〇〇作品以上が知られ

ているが、室町時代に遡るものは模本も含めて四作品のみで、その他はすべて江戸時代の作品である。洛中洛外図は文字による資料でなく描かれた絵画であるが、同時代を視覚化できる資料として建築史や歴史学、地理学の分野において早くから注目されてきた。近年では都市史、農業史、民俗史、民衆史、生活史などの個別の資料や研究対象としても使われ、その利用価値はますます高まっている。[1]

これまでの研究では、室町時代の歴博甲本と上杉本、江戸時代の舟木本が主たる研究対象になっていて、それ以外の作品は資料紹介以上の研究はほとんど見られなかった。江戸時代中期の洛中洛外図においては紹介されていない作品も数多い。本稿では住吉具慶本群の作品一〇点を紹介するとともに、描写内容とその特徴に注目することにより、資料紹介を越えた考察を行いたい。

第二節　研究史の整理

洛中洛外図の全体像を提示した研究には、武田恒夫氏によるものが第一に挙げられる。[2]武田氏は、上京と下京を各隻に描き分けた室町時代後期の洛中洛外図を第一期の定型、洛中の南北の通りを境に西側と東側を各隻に描き分けた江戸時代前期の洛中洛外図を第二期の定型と整理した。武田氏の研究を受けて、山根有三氏、小沢弘氏、辻惟雄氏の研究などがさらなる細分を試みているが、[3]大枠は武田氏の研究が現在も踏襲されている。[4]

江戸時代の洛中洛外図に関する研究については、個別作品の紹介を中心にするもの、作品群全般を対象にして論じるもの、歌舞伎や町屋などを考察する資料として複数の作品を利用する研究がある。このうち作品群全般を対象とするものを発表順に整理すると、最初の研究として内藤昌氏のものが挙げられる。氏は描かれた寺社などを地図上に落として景観を類型化し、その変遷を明らかにした。[5]次いで片岡肇氏は、画面の構図に関係する筋勝手を手掛かりに、一〇〇本以上現存する洛中洛外図の類型化を試みようとした。[6]水本邦彦氏は、洛中洛外図は絵師によって捉えられた京都の形の投影図であるという着想から、構図と時代との相関関係を読み取ることにより、都市論として考察した。[7]大塚活美は、水本氏の研究を承けて、二条城前の行列に屏風の主題に関わる要素を見出し、それに基づいて作品の時代分けを試みた。[8]大澤泉・加藤裕美子氏は、ランドマークの設定により第二定型の諸本の分類を行った。[9]

江戸時代の洛中洛外図全般を対象とする研究は以上が主なものになるが、これらにおいても江戸時代前期の作品が考察の主たる対象で、江戸時代中期の作品を取り上げるものは少ない。[10]本稿の対象とする具慶本洛中洛外図作品についてもほとんど触れられていない。そこで本稿では、これらの分析手法を援用しつつ、住吉具慶本作品群の描写内容を考察する。

第一章　住吉具慶本洛中洛外図作品群の資料

第一節　住吉具慶本洛中洛外図の紹介

江戸時代の洛中洛外図屏風の中に、「法眼具慶筆」の落款をもつ作品がある。現在は、六曲一双屏風の左隻のみ知られ、京都国立博物館

に寄託されている（個人蔵）[11]。材質は紙本金地着色、寸法は縦一六六・六センチメートル、横三六〇・二センチメートルである。伝来の経過は明らかにされていない。本稿では、以下、住吉具慶本または京博寄託本と略記する。この作品には、第六扇の左下端に「法眼具慶筆（印）」と落款がある。法眼具慶は江戸時代前期から中期にかけて画壇で活躍した住吉具慶で、作風からも具慶の作であろうとされる。次節で詳述するが、具慶が法眼に叙されたのは元禄四年（一六九一）であるから、この作品は元禄四年から宝永二年（一七〇五）に没するまでの期間の制作と考えられる。

作品全体から受ける印象は、金雲部分が多く、人物も小さく均一に描かれていて、優雅で、穏やかな感じがする。作品の基本的な様式としては、斜め線が右上から左下に向かう順勝手の作品である。二条城前の行列は寛永三年（一六二六）九月の後水尾天皇の二条城への行幸を描く。描写の地理的な範囲は、第一扇の右端上部には岩屋寺、下部には大徳寺、第六扇の左端上部には八幡、下部には西本願寺までを描く。金雲は、金箔による源氏雲が画面に五～六層に描かれ、上部にすやり霞、一部に砂子散らしが見られる。金雲の金箔は約一〇・二センチメートル方角であり、規則正しく貼られた箔足が幾何学的な模様を描き出す。地の部分も金地である。

寺社名等を記す貼り札は、左隻のみで四八ヶ所を数える。書かれる文字は、平仮名と漢字混じりで、書体も美麗である。描かれる人数は左隻のみで約八〇〇人を数える。二条城行幸の行列と見物人を描く第一扇から第三扇に多くの人が描かれる。二条城前の後水尾天皇の行幸行列は、天皇の載る鳳輦が二条城外堀近くの西堀川通に描かれる。鳳輦を担ぐ駕輿丁の衣装は薄黄色で、白張を表す。

第二節　住吉具慶について

住吉具慶は、寛永八年（一六三一）に住吉如慶の長男として京都で生まれた。絵を父の如慶に学んで多くの画事に参加し、住吉派二代目として活躍した。延宝二年（一六七四）に妙法院の堯恕法親王の下で剃髪して具慶の名前を賜り、その年に法橋に叙せられた。天和三年（一六八三）に幕府により江戸に召し出され、貞享二年（一六八五）三月二六日には将軍家御用画師となり、元禄四年（一六九一）一二月二日には法眼位に叙せられ、宝永二年（一七〇五）四月三日に江戸で亡くなっている[12]。

具慶の父である住吉如慶は慶長三年（一五九八）生まれで、絵を土佐派本家の土佐光吉に学んだ。寛文元年（一六六一）に如慶の名前を賜り、翌寛文二年（一六六二）には後西天皇の勅により住吉家を興し、寛文一〇年（一六七〇）六月二日に没している。如慶の作風は、土佐派に学んだやまと絵の画風を基礎としながらも、狩野派や宋元画を学んでいる点が指摘されている。具慶についても、その作風を継承するとともに、描写は一段と精細さを加え、彩色も鮮麗さを増して一層装飾的になっていると評価される。

具慶の作品には、歌絵、物語絵、花鳥画、行事絵など、やまと絵の伝統的な題材を扱ったものとともに、社寺縁起、人物絵伝、時代風俗を扱った作品もある[13]。如慶・具慶を研究する美術史家の下原美保氏に

よると、如慶父子は天台宗門徒であったことから天海僧正との繋がりが生まれ、それが幕府の御用絵師に就任する道筋を作ったのではないかと推測する。[14] また、如慶・具慶の物語絵に描かれた寝殿造りを分析した建築史家の赤澤真理氏は、絵画における寝殿造りの描き方は如慶父子の物語絵になり復古的な表現が現れたこと、それは資料をもとに考証して描いた結果であることを指摘する。[15] 後述するように、住吉具慶本洛中洛外図作品群の特徴は、年中行事を描くこと、地図や地誌等の情報を利用することにあり、この点も住吉派の伝統、資料による考証を得手とする如慶・具慶の制作意欲を反映したものといえる。

具慶の画事に関して、住吉派五代の広行（宝暦五年〈一七五五〉～文化八年〈一八一一〉）の編纂した『倭錦（本朝画事）』の具慶の条に「一洛中洛外図　屏風巻物数有」とあり、具慶が洛中洛外図の屏風や巻子を描いたとされる。屏風は本稿で取り上げる作品であるが、巻子は東京国立博物館等にある「都鄙図」に相当するとされる。[16] 都鄙図は都市部と農村部を含んだ風俗画ないしは景物画で、京都を描くものでないことから洛中洛外図巻子とは言い難いが、現存する作品から見る限り、『倭錦』のいう巻物は都鄙図のことだと考えられる。また、国学者の黒川真頼による『考古画譜』には、具慶の描ける洛中洛外の画は数種ありとする。[17]

東京藝術大学に収蔵されている住吉派の粉本の中に「都鄙図」の下画が何点かある。その一つに明治四年（一八七一）に画家の板橋貫雄が「元禄年中法眼具慶依綱吉将軍之好画洛中洛外之景色（略）」と識語を寄せる。[18] 徳川綱吉が将軍位にいたのは延宝八年（一六八〇）から宝永六年（一七〇九）までで、具慶を江戸に召したのは将軍綱吉の指示と思われる。綱吉が洛中洛外の景色を具慶に描かせたかどうかは資料上で確認できないが、天和三年（一六八三）に京都所司代稲葉正通より洛中洛外図屏風を献じられていて、[19] その画題に関心を持っていた可能性がある。綱吉は書画を好んだ将軍で、自らも絵を描き大名・旗本等に下賜している。

第三節　住吉具慶本洛中洛外図作品群の紹介

「法眼具慶筆」の落款をもつ京博寄託本に描写の類似する作品が一〇点知られる。本稿ではこれらの作品を住吉具慶本洛中洛外図作品群（住吉具慶本作品群と略記）と名付けて考察する。この節では各作品の所蔵先、伝来等を紹介する。作品の基礎的な資料情報は、表一のとおりである。

個人本（芦屋市立美術博物館寄託本）は図版による紹介のない作品で、[20] 伝来の経過も不明である（以下、芦屋市美寄託本と略記）。豊橋市二川宿本陣資料館本は、東海道の三三番目の宿場である二川宿の本陣であった馬場家に伝わったものである（以下、二川宿本と略記）。[21] 貼り札は、右隻に七四ヶ所あり、枚数が多い。大阪人権博物館本は、一九九七年に購入されたものである（以下、人権博本と略記）。[22] 雲形は銀箔による源氏雲で、地は着彩である。銀雲が酸化しているため黒ずんで見え、金地でなく薄い着彩のため、全体としては制作途上のように見えるが、内容的には完成作である。貼り札は、現在は見られないが、跡らしきものも窺える。

表一　住吉具慶本洛中洛外図作品群の基礎的な資料情報

略称	京博寄託本	芦屋市美寄託本	二川宿本	人権博本	前田・井伊家本	武生本	愛媛県美寄託本	フリーア本	歴博Ｆ本	真野家本	学習院大本
所蔵	個人（京都国立博物館寄託）	個人（芦屋市立美術博物館寄託）	豊橋市二川宿本陣資料館	大阪人権博物館	(不明)	越前市武生公会堂記念館	個人（愛媛県立美術館寄託）	フリーア美術館	国立歴史民俗博物館	正法寺	学習院大学学芸員資格取得に関する委員会
伝来	(不明)	(不明)	馬場家	購入	前田・井伊家	寄贈	(不明)	購入	購入	真野家	購入
形態	6曲1隻(左隻)	6曲1双	6曲1双	6曲1双	6曲1双	6曲1双	6曲1双	6曲1隻(右隻)	6曲1双	6曲1双	1幅(右隻第6扇)
材質・彩色	紙本・着色	紙本・着色	紙本・着色	紙本・着色・銀	紙本・着色	紙本・着色	紙本・着色	紙本・着色	紙本・着色	紙本・着色	紙本・着色
高さ(cm,尺寸)	166.6(5.5尺)	(5尺)	151.0(5尺)	149.0(5尺)	(不明)	155.7(5尺)	155.0(5尺)	150.5(5尺)	124.0(4尺)	109.5(3.5尺)	146.0(5尺)
幅(cm)	360.2		353	352	(不明)	366.3	324	348	283.8	266.7	56.1
雲　種類	源氏雲・すやり霞	源氏雲	源氏雲	源氏雲	源氏雲	源氏雲	源氏雲	源氏雲	源氏雲	源氏雲	源氏雲
技法	金箔、砂子	金箔、砂子	金箔、砂子	銀箔	(不明)	金箔、砂子	金箔、砂子	金箔、砂子	金箔、砂子	金箔、砂子	金箔、砂子
貼札　枚数	左48、右-	無し	左36、右74	痕有り	有り	左40、右52	左7、右15	左-、右20	左34、右44	左37、右48	左-、右7
文字	平仮名・漢字	—	漢字が主	—	(不明)	平仮名・漢字	平仮名が主	平仮名が主	平仮名・漢字	平仮名・漢字	平仮名・漢字
人数　右隻	—	約700人	約600人	約1000人	(不明)	約900人	約1000人	約1000人	約600人	約600人	67人
左隻	約800人	約900人	約700人	約1100人	(不明)	約1100人	約1100人	—	約700人	約700人	—
勝手　右隻	—	順	順	順	順	順	順	順	順	順	順
左隻	順	順	順	順	順	順	順	—	順	順	—
右隻　右端	—	稲荷社	稲荷社	稲荷社	稲荷社	稲荷社	稲荷社	稲荷社	稲荷社	稲荷社	—
	—	三十三間堂	三十三間堂	三十三間堂	三十三間堂	三十三間堂	三十三間堂	三十三間堂	三十三間堂	三十三間堂	—
	—	東本願寺	東本願寺	東本願寺	東本願寺	東本願寺	東本願寺	東本願寺	東本願寺	東本願寺	—
左端	—	鞍馬寺	鞍馬寺	鞍馬寺	鞍馬寺	鞍馬寺	鞍馬寺	鞍馬寺	鞍馬寺	鞍馬寺	鞍馬寺
	—	上賀茂社	上賀茂社	上賀茂社	上賀茂社	上賀茂社	上賀茂社	上賀茂社	上賀茂社	上賀茂社	上賀茂社
	—	内裏	内裏	内裏	内裏	内裏	内裏	内裏	内裏	内裏	内裏
左隻　右端	岩屋寺	岩屋寺	岩屋寺	岩屋寺	岩屋寺	岩屋寺	岩屋寺	—	岩屋寺	岩屋寺	—
	北野社	北野社	北野社	北野社	北野社	北野社	北野社	—	北野社	北野社	—
	大徳寺	町屋	千本	千本	千本	千本	町屋	—	町屋	町屋	—
左端	八幡	八幡	八幡	八幡	八幡	八幡	八幡	—	八幡	八幡	—
	東寺	東寺	東寺	東寺	東寺	東寺	東寺	—	東寺	東寺	—
	西本願寺	西本願寺	西本願寺	西本願寺	西本願寺	西本願寺	西本願寺	—	西本願寺	西本願寺	—
二条城　位置	左隻2-3扇	左隻2-3扇	左隻2-3扇	左隻2-3扇	左隻2-3扇	左隻2-3扇	左隻2-3扇	—	左隻2-3扇	左隻2-3扇	—
内裏　南門	—	有り	有り	有り	有り	有り	有り	有り	有り	有り	有り
堀川通行列	行幸(鳳輦)	行幸(鳳輦)	行幸(鳳輦)	行幸(鳳輦)	行幸(鳳輦)	行幸(鳳輦)	行幸(鳳輦)	—	行幸(鳳輦)	行幸(鳳輦)	—
年中行事	有り	有り	有り	有り	有り	有り	有り	有り	無し	有り	有り

前田子爵・井伊子爵旧蔵本は、大正八年（一九一九）一二月の「前田子爵・井伊子爵家御蔵器入札」目録に「時代金地　京名所屏風　一双」として載る作品で、現在の所在等については不明である（以下、前田・井伊家本と略記）[23]。図版を見る限り、本稿で紹介する他の作品と類似するが、同一図柄ではないことから別個のものと判断できる。寸法は不明であるが、祇園会の山鉾を二三基近く描くことから、高さ五尺の屏風と類推できる。

越前市武生公会堂記念館本は、江戸時代から武生で打刃物問屋を経営する三田村甚三郎氏から一九九三年に武生市に寄贈されたものである（以下、武生本と略記）[24]。個人本（愛媛県立美術館寄託本）は図版等に未紹介の作品で[25]、伝来の経過は不明である（以下、愛媛県美寄託本と略記）。貼り札は、右隻一五ヶ所、左隻七ヶ所と極端に少ない。アメリカ合衆国ワシントン市にあるスミソニアン博物館群のフリーア美術館所蔵の作品は六曲一隻屏風（右隻のみ）で[26]、目録によると一九五九年の購入品である（以下、フリーア本と略記）。

国立歴史民俗博物館F本は、高さ四尺の大きさの作品である[27]。伝来の経過は不明である（以下、歴博F本と略記）。この作品には、右隻第一扇の右下端と、左隻第六扇の左下端に「法眼具慶筆（印）」の落款がある。ただし、絵の描き方等から後筆の可能性が高い。京都府八幡市の正法寺所蔵の作品は、高さ三尺五寸の大きさである[28]。元は寺の先代住職夫人の実家である真野家に伝来したものという（以下、真野家本と略記）。

学習院大学の学芸員資格取得に関する委員会所蔵（学習院大学史料館管理）の洛中洛外図掛軸は、材質は紙本金地着色、形態は一幅である[29]。住吉具慶本作品群の右隻の第六扇にあたる部分が軸装になっていて、近年の購入品である（以下、学習院大本と略記）。

第二章　住吉具慶本洛中洛外図作品群の特徴

第一節　絵画的要素について

二-一-一　雲形

洛中洛外図を絵画として見た場合、その特徴の一つに雲形の存在がある。洛中洛外図の雲形については、所広秋氏による先行研究がある[30]。所氏は、雲の形と動き、雲の画面に占める面積、すやり霞との併用などの視点から、周知の作品を分析した。そして雲形を、Ⅰ複雑な動きで画面を広く覆う雲、Ⅱ幅が狭く、遠近を感じさせる雲、Ⅲ規則的なうねりをもつ雲、Ⅳうねりが小さく水平に長く伸びる雲、Ⅴ幅広でゆったり流れる雲に分類した。所氏の分類によると、具慶本及び具慶本作品群はⅣに該当する。具慶本作品群の雲形を細部にわたって比較すると、人権博本と前田・井伊家本、愛媛県美寄託本とフリーア本との相似性が認められる。

京博寄託本の雲形は、金箔の源氏雲を主としながらも、画面上部では金砂子の雲を併用する。砂子蒔きの源氏雲を使う洛中洛外図は、江戸時代前期の後半頃から見られる傾向があり、その点でもこの作品は新しい要素を持つといえる。金砂子の使用は、やまと絵の作品では早くから見られ、住吉具慶本はその技法を洛中洛外図に援用したものとも考えられる。

洛中洛外図の雲形は、金箔による源氏雲の作品が圧倒的に多い中で、既述のように人権博本は銀箔を使用する。徳川家康死去後の記録である元和四年（一六一八）の「駿府御分物御道具帳」には金屏風と銀屏風が同数程度記され、元和八年の「御櫓古帳」にも金屏・銀屏・水墨・古筆などの屏風の記載がみられる。[31] このように当時においても多様な屏風があるなかで、洛中洛外図の大半が金屏風であることはそれ自体が大きな特徴で、その中にあって人権博本が銀屏風に仕上げられていることは特筆できる。

二-一-二　貼り札

洛中洛外図の絵画的な特徴の一つに、貼り札（貼り紙）がある。作品により貼り札の有るものと無いものがあり、画面に直接に文字を書き込む形式も上杉本と舟木本に見られるが、大半の作品は文字を書いた紙片を貼り付ける形である。江戸時代の作品では貼り札の有る作品と無い作品とは約二対一の割合で存在する。住吉具慶本作品群では九作品に貼り札が有り、貼り札が付く作品の比率は高い。

貼り札の紙は、金地のもの、着色のもの、地模様のあるもの、無地のものが見られる。全体としては無地が多く、紙の色合いは白色系というよりも黄土系である。貼り札の紙形は、概ね縦長の長方形である。張り札に文字を書くだけのものが普通であるが、歴博F本では張り札の紙全体を赤枠で囲み、金雲などの地模様との区別をして装飾的になっている。武生本も赤線、黒線で囲っている。このような装飾も具慶本作品群の一つの特徴である。

貼り札が指し示すものには、屋敷名、寺社名、建物名、自然地名、町名、通り名、橋名、事物名、祭礼関係名、店名、月名などがある。これらを総じていえば、描かれる地点の名称の表示、描かれる事物の補注といえる。住吉具慶本作品群では、作品の上部に描かれる寺社の違いは絵の図柄よりも貼り札によっている。正月・二月などの月名を表すのは年中行事を描き込む住吉具慶本作品群にしか見られない。なかでも京博寄託本は「十一月火焼」「十二月すゝ払」と具体的な行事名までも一枚の貼り札に記していて、住吉派の歳時への強い関心が窺われる。

貼り札の数は、聚楽行幸を描く洛中洛外図尼崎本が右隻に九三ヶ所、左隻に五七ヶ所、併せて一五〇ヶ所を付けるのが最多で、次いで住吉具慶本作品群の二川宿本の右隻に七四ヶ所、左隻に三六ヶ所の併せて一一〇ヶ所が多い。逆に最も少ないものは、住吉具慶本作品群の愛媛県美寄託本で、右隻に一四ヶ所、左隻に七ヶ所の併せて二一ヶ所である。左右隻を比べると、右隻の方が貼り札の多い傾向が見られ、具慶本の諸作品も同様である。

第二節　地理的要素について

二-二-一　描写範囲

洛中洛外図の描写範囲は、作品の上部である洛外の山地部、作品の中程である洛外の平地部、作品の下部である洛中部分の三ヶ所を基準にして比較できる。京博寄託本では、洛外の山地部を第一扇の岩屋寺から始め、第六扇の八幡で終わる。洛外の平地部では、大徳寺から始め、東寺までとする。洛中部分では、堀川通中立売から始め、西本願

寺までとする。二川宿本の右隻では、洛外の山地部を稲荷社から始め、鞍馬寺で終わる。洛外の平地部では、三十三間堂で始め、上賀茂神社までとする。洛中部分では、東本願寺で始め、内裏までとする。

洛中洛外図の描写範囲で、時代により変化がみられるのは、洛外の山地部の鞍馬である。住吉具慶本作品群では、鞍馬は右隻第六扇に、比叡山よりも左側に描かれる。各社寺の配置を検討した加藤・大沢氏の研究によると、室町時代から江戸時代前期までの作品では鞍馬は左隻第一扇に描かれていて、右隻第六扇の左端は比叡山であった。サントリー美術館本、大阪市立美術館本では鞍馬は右隻第六扇の左端となり、左隻第一扇は岩屋寺から始まるようになる。この背景には、洛中洛外図の描く方角性の変化がある。初期の洛中洛外図では、右隻に京都の東と南、左隻に西と北を描いたことから、鞍馬のある北部は左隻に位置した。その描き分けが江戸時代前期にも継続されたが、洛中部分については油小路通付近を境にして東西に分けて描くようになり、江戸時代前期後半頃からは洛中の東西区分が洛外部分にまで及んだ結果、賀茂川水系の上流部に位置する鞍馬が、右隻を描く洛外の北東部に位置づけられることになった。貞享三年（一六八六）の「京大絵図」では鞍馬が右上に載っていて、当時の地理的認識が屏風の図にも反映するようになったものともいえる。

二-二-二　地点の表示

住吉具慶本作品群を比較すると、同じ図画に対して異なる表示の貼り札の見られるものがある。右隻第三扇の建仁寺の図には、武生本・歴博F本では「けんにんじ」の貼り札があるが、二川宿本・愛媛県美寄託本では「安井」「やすひ」の貼り札が付く。建仁寺の図は藤見の光景であり、藤見といえば建仁寺の東側の蓮華光院（安井門跡）が有名であったことから、絵を借用して地名だけを変えたものといえる。右隻第五扇の銀閣寺には、武生本・歴博F本では「ぎんかくし」「銀角じ」であるが、フリーア本では「いわくら」とする。銀閣寺より北側にある寺院らしき建物には、武生本では「白川」、フリーア本では「小はら」、歴博F本では「しやうくんちそう」、真野家本では「将軍地蔵」の貼り札が付く。将軍地蔵は北白川の瓜生山にあり、承応三年（一六五四）の「新板平安城東西南北町并洛外之図」の地図に載る。右隻第五扇の下鴨社について、二川宿本・歴博F本・真野家本では「下加茂」「下かも」とするが、武生本では「みたらし」、フリーア本では「たゞす」とする。「みたらし」は下鴨社境内を流れる川の名称で、「たゞす」は下鴨社の森の名前である。承応三年（一六五四）の地図では「みたらし」の文字が載る。

左隻第五扇の臨川寺について、武生本・歴博F本では「りんせんし」の貼り札が付くが、二川宿本では「しゆしやく権現」とする。朱雀権現は、朱雀村にある浄土宗の権現寺で、慶長年間に中興された。承応三年（一六五四）の地図にも「しゆしやくこんけん」とあり、貞享三年（一六八六）の地図には「七条朱雀権現堂」と載る。左隻第六扇の西芳寺について、京博寄託本・武生本・真野家本では「西方寺（西ほうじ）」の貼り札があるが、二川宿本では「尼寺」と「みつ薬師」の二枚の貼り札が付く。「尼寺」は壬生八条にあった遍照心院大通寺、「みつ薬師」は西七条村にある真言宗寺院の水薬師を指す。水

薬師は正保年間（一六四四〜四八）に板倉重宗が再興したとされ、明暦四年（一六五八）の『京童』に絵入りで紹介される。歴博F本では壬生寺のところに「あまてら」の貼り札がある。このように、この作品群では同じ絵に異なる名所の宛てられる事例がみられる。

第三節　歴史的要素について

二-三-一　二条城・内裏

住吉具慶本作品群の二条城は左隻第二〜三扇で、その全体像はほぼ共通していて、外堀だけでなく、本丸を囲む内堀の一部も描かれる。城の東南と東北には隅櫓があり、天守閣は本丸の南西隅に遷されていて、寛永三年（一六二六）の後水尾天皇行幸に際して改修された姿である。東大手門は江戸時代初期の櫓門ではなく高麗門に、東大手門から東南・東北の隅櫓に至る土塀（または多聞櫓）には江戸時代初期の格子窓ではなく石落しが描かれる。土塀は、行幸を描く作品には矢狭間を描くものもあるが、『京童』の絵では石落しであることから、行幸時かその後に改修されたものと推測される。

京博寄託本の二条城の天守閣は五層に描かれ、東側の屋根を見ていくと、一層目には二組の千鳥破風、二層目には唐破風、三層目には二組の千鳥破風が乗り、四層目は唐破風の屋根として描かれる。北側は、一層目には唐破風、二層目には二組の千鳥破風、三層目には唐破風が乗るように描かれる。具慶本作品群の他の作品は、天守閣の屋根の破風の描き方が京博寄託本とは異なり、東側・北側ともに、一層目には一組の千鳥破風、二層目には二組の千鳥破風、三層目には一組の千鳥破風が乗っていて、四層目は東側のみが唐破風の屋根として描かれる。資料に基づく寛永度二条城天守閣復元図では、東側の屋根が正面となり、一層目には二組の千鳥破風、二層目には一組の千鳥破風、三層目には唐破風が乗り、北側は、取り付け櫓に千鳥破風、一層目には唐破風、二層目には二組の千鳥破風、三層目には一組の千鳥破風が乗る姿とされる。[32] この復元図の屋根の形は、京博寄託本に近い。

内裏は、右隻第六扇に描かれる。敷地の南側の築地塀の凹字型部分に檜皮葺きの南御門、その内側には檜皮葺きの紫宸殿、それに九〇度向きを変えて檜皮葺きの清涼殿が付く。紫宸殿前の庭には左近の橘のみ描かれる。近世の内裏は、失火等によりたびたび焼失し、そのたびに再建されている。研究によると、天正度、慶長度、寛永度、承応度、寛文度、延宝度、宝永度、寛政度、安政度の九度にわたって造営されている。[33] 具慶本作品群の内裏は、宝永度以前の建物配置を示す。内裏の描き方で具慶本の各本を比べると、築地塀の筋の数、築地塀の下段の石垣、西側の築地塀、敷地南西の樹木などに相違点が指摘できる。

二-三-二　寺社

寺社の描写は制作年を考察する要素にもなる。京博寄託本の左隻第二扇の上部に見える仁和寺五重塔は寛永一四年（一六三七）、左隻第六扇の西本願寺の下に見える本国寺の五重塔は明暦元年（一六五五）の建立で、この作品はこれ以降の制作といえる。

住吉具慶本作品群には、他の作品であまり取り上げられない寺社が多く出てくる。例えば、京博寄託本の左隻第一扇の「いはや山」「ひらの」、第三扇の「のゝ宮」である。「いはや山」は鴨川の上流の雲ヶ

畑にある岩屋山志明院のことで、「ひらの」は北野天満宮の北西にある平野神社で、寛永年間（一六二四～四四）に比翼春日造と呼ばれる社殿二棟が再建されている。「のゝ宮」は嵯峨にある野々宮神社である。岩屋山と平野は上杉本洛中洛外図にも出てくるが、それ以外の作品には頻出しない。承応三年（一六五四）の地図には「岩屋」「平野」「野々宮」が、『京童』には「いは屋」「平野」「野の宮」が載っている。

右隻をみると、武生本では、第二扇に「りやうせん」、第三扇に「長楽寺」「かうだいじ」、第四扇に「双林寺」「丸山」「一心ゐん」、第六扇に「新黒谷」「松かさき」などがある。それらは、地図や『京童』に載る霊山正法寺、長楽寺、高台寺、双林寺、円山安養寺、一心院、新黒谷、松ヶ崎を指している。その描かれ方は、建物の一部のみを描いていて、貼り札だけのものもあり、地図や図書の挿図などから名所を拾ったように見受けられる。真野家本の右隻第二扇の清水寺に「しかま塚」の貼り札がある。そこの描写には塚のようなものは描かれていず、絵についての直接的な説明ではない。鹿間塚は、坂上田村麻呂が鹿狩りにきて僧延鎮に殺生を戒められたために鹿の供養塚を作った清水寺の縁起に由来する。承応三年（一六五四）の地図に「鹿まつか」と載り、それを典拠にすると思われる。

第四節　民俗的要素について

二―四―一　年中行事

住吉具慶本作品群には、年中行事が細かに描かれる。右隻に一月から六月までの行事を、左隻に七月から一二月までの行事を配置する（表二）。京博寄託本は七月を左隻第一扇・第二扇下部に、八月を第二扇から第三扇上部に、九月を第一扇から第三扇の中央部及び第四扇に、一〇月を第四扇に、一一月を第五扇に、一二月を第六扇に描き、第一扇から第六扇に向かって月が進行する。右隻の事例を二川宿本で見ると、正月を第二扇下部に、二月を第一扇上部に、三月を第二扇上部に、四月を第三扇に、五月を第五扇から第六扇に、六月を第三扇から第五扇に描いている。このように第一扇から第六扇（画面の右から左）へと月の進む描き方が住吉具慶本作品群の行事の配置の特徴である。この月別の配置・進み方は、第六扇から第一扇に進む室町期の描き方とは異なる。室町期の作品は、春夏秋冬の季節と各月の行事の双方が組み合わされているが、住吉具慶本作品群の場合は月次の行事のみで四季の描き分けはなく、その点でも異なる。一年の最初である正月については、右隻の第二扇に配するもの（芦屋市美寄託本、二川宿本等）と、第一扇に置くもの（愛媛県美寄託本、フリーア本）がある。

正月から六月までの行事を二川宿本で見ると、正月の風景は第二扇下部の町家のところに描かれる。家の前には背の高い門松が二本一組で立てられ、そこに竹を渡して注連飾りを付ける。建物の軒には注連縄が張り巡らされ、裏白、譲り葉が付けられる。路上には鼓と袋を持った万歳の一組がいる。主人と従者の二組が年始挨拶に回る。道路の中央では、振々毬打に興じる人、羽根突きをする人がいる。門松の描き方は、貞享五年（一六八八）刊行の貝原好古著『日本歳時記』の図に類似する。[34] 京都の年中行事を記した、延宝四年（一六七六）成立の『日次紀事』には、元日の人事として門松飾藁、千寿万歳などが記さ

表二　住吉具慶本洛中洛外図作品群の年中行事描写

	行事名	京博寄託本	芦屋市美寄託本	二川宿本	人権博本	前田・井伊家本	武生本	愛媛県美寄託本	フリーア本	歴博Ｆ本	真野家本	学習院大本
	月名貼札	有り	貼札無し	無し	貼札無し	不明	有り	無し	無し	無し	有り	無し
正月	門松	—	右2扇(2組)	右2扇(1組)	右2扇(2組)	右2扇(1組)	右2扇(2組)	右1扇	右1扇	無し	右2扇(2組)	—
	万歳	—	右2扇	右2扇	右2扇	(不明)	右2扇	無し	無し	無し	右2扇	—
	振々毬打	—	右2扇	右2扇	右2扇	(不明)	右2扇	右1扇	右1扇	無し	右2扇	—
	羽根突き	—	(不明)	-	右3扇	(不明)	右3扇	右1扇	右1扇	無し	右2扇	—
2月	初午(稲荷)	—	右1扇	右1扇	右1扇	(不明)	右1扇	右1扇	右1扇	無し	右1扇	—
3月	桜見	—	右2扇(清水寺)	右2扇(清水寺)	右2扇(清水寺)	(不明)	右2扇(清水寺)	右2扇(清水寺)	右2扇(清水寺)	無し	右2扇(清水寺)	—
4月	藤見	—	右3扇(建仁寺)	右3扇(安井)	右3扇(建仁寺)	(不明)	右3扇(建仁寺)	右3扇(安井)	右3扇(建仁寺)	無し	右3扇(建仁寺)	—
5月	節句幟	—	右5-6扇(3本)	右5-6扇(3本)	右5-6扇(3本)、右2扇	右5-6扇(3本)	右6扇(4本)	右6扇(3本)	右6扇(4本)	無し	右5-6扇(3本)	右6扇(2本)
	飾り兜		(不明)	右6扇(1本)	右5扇(1本)	(不明)	右6扇(1本)	右6扇(2本)	右6扇(2本)	無し	右5扇(2本)	右6扇(1本)
	菖蒲葺き		(不明)	右6扇?	右5-6扇	(不明)	右6扇	(不明)	右6扇	無し	無し	右6扇
	印地打	—	右5-6扇	右5-6扇	右5-6扇	右5-6扇	右5扇	右5-6扇	右5-6扇	無し	右5扇	右（5-）6扇
	賀茂競馬	—	右6扇	右6扇	右6扇	右6扇	右6扇	右6扇	右6扇	右6扇	右6扇	右6扇
6月	祇園会(山鉾)	—	右3-5扇(23基)	右3-5扇(22基)	右3-5扇(23基)	右3-5扇(不明)	右3-5扇(23基)	右3-5扇(23基)	右3-5扇(23基)	右3-5扇(12基)	右3-5扇(12基)	—
7月	盆踊り	左1扇	左1扇	左1扇	左1扇	左1扇	左1扇	左1扇	—	無し	左1扇	—
	盆灯籠売り	左2扇	左2扇	左2扇	左2扇	(不明)	無し	無し	—	無し	無し	—
	小町踊り	左2扇	左2扇	左2扇	左2扇	左2扇	左2扇	左2扇	—	無し	左2扇	—
8月	中秋名月	左3扇	左1扇	左1扇	無し	左1扇	左1扇	左1扇	—	無し	左1扇	—
	月見	左2扇(広沢池)	左1扇(金閣寺)	左1扇(金閣寺)	左1扇(金閣寺)	左1扇(金閣寺)	左1扇(金閣寺)	左1扇(金閣寺)	—	無し	左1扇(金閣寺)	—
	放生会	左6扇	(不明)	無し	無し	(不明)	無し	(不明)	—	無し	無し	—
9月	二条城行幸	左3扇	左3扇	左3扇	左3扇	左3扇	左3扇	左3扇	—	左3扇	左3扇	—
	菊	左4扇	無し	無し	無し	(不明)	無し	無し	—	無し	無し	
10月	紅葉狩	左4扇	左4扇	(不明)	左4扇	(不明)	左4扇	左4扇	—	無し	左5扇	—
11月	お火焚き	左5扇	左5扇	左5扇	左5扇	左5扇	左5扇	左5扇	—	無し	左5扇	—
12月	煤掃き	左6扇	左6扇	左6扇	左6扇	左6扇	左6扇	左6扇	—	無し	左6扇	—
	正月用品売り	左6扇(裏白・門松)	左6扇(裏白)	左6扇(門松)	左6扇(裏白・門松)	(不明)	左6扇(裏白・門松)	左6扇(裏白・門松)	—	無し	左6扇(振々)	—
	節季候	左6扇	左6扇	左6扇	左6扇	左6扇	左6扇	左6扇	—	無し	左6扇	—

れ、その様子を描くものともいえる。

二月の行事は稲荷社への初午詣で、稲荷の社殿に参拝する人が描かれる。境内には、焼き物（伏見人形）を売る露店が出ている。『日次紀事』の二月条には、初午の稲荷社詣として、門前の家々では大小の陶器を売ると記載される。三月は清水寺での桜見で、四月は安井の藤見である。

五月は端午の節句が描かれる。建物の軒の菖蒲葺き、通りに面して幟や飾り兜が立てられ、通りでは子どもたちが笠のような兜を被り、長刀や木刀（尚武刀）で尚武合わせをする。飾り兜の様子は、『日本歳時記』の図などに類似する。尚武合わせは、印地打と呼ばれる行事であるが、『日次紀事』に記述はなく、江戸時代中期の京都で行われていたかは不明である。第六扇に描かれる上賀茂社の競馬も五月の行事である。

六月は祇園会である。祇園会は祇園社の行事としての神輿渡御と、氏子である下京の町々の行事である山鉾巡行とがある。具慶本作品群では、神輿渡御はなく、山鉾巡行のみ描かれる。山鉾巡行は六月七日に行われる前の祭りと、六月一四日の後の祭りがあるが、具慶本作品群では前の祭りの山鉾二三基をすべて描き上げる（歴博F本と真野家本は小さな屏風のため一二基のみ）。山鉾の順番は、二三基を描く七作品とも同一の順番である（歴博F本と真野家本の一二基も同一）。山鉾の形態としては、鉾の屋根の妻側に飾り花が付いているのが、この時代の特徴を表す。

左隻に描かれる行事を京博寄託本で見ると、七月は盆踊り、小町踊り、盆灯籠売り等である。盂蘭盆に際して軒に吊るされるのが盆灯籠で、盆灯籠売りは長い柄の前後に灯籠を吊り下げて振り売りする。盆踊りは、通りの真ん中で、長い柄に付けた盆灯籠を中心に、数人の男女が手を挙げて輪踊りする。小町踊りは七夕の日の踊りで、道の真ん中で太鼓を手にした数人の女性が輪になり踊る。江戸時代初期の「おどりの図」絵巻（国立国会図書館蔵）の図に似る。

八月は中秋の月見である。広沢池に浮かぶ船の上からと、池畔の宴席の場から満月を眺めている。月は第三扇の上端、小倉山の左手に出ている。京博寄託本以外の具慶本作品群では、満月は第一扇上端に描かれていて、月を見る場面は金閣寺の鏡湖池の池畔からである。京博寄託本には延宝七年（一六七九）に再興された八月一五日に営まれる八幡の放生会が第六扇に描かれる。九月は、京博寄託本のみ、神泉苑の南側の屋敷に菊の花が咲いている一画があり、重陽の節句を表している。その他の作品では、後水尾天皇の二条城行幸が寛永三年（一六二六）九月に行われたことから、それを九月の行事に見たてている。後水尾天皇の二条城行幸は歴史的事象であって歳時ではないが、そのように見たてるところにこの作品群を制作した工房の特徴がある。

一〇月は紅葉狩りで、嵐山、松尾社に紅葉した樹木が見られ、松尾社では紅葉の散る様子と宴が描かれる。一一月は、町内のお火焚き行事である。「十一月火焼」の貼り札があり、通りの真ん中に二つの火床と供え物の机とが置かれ、子ども数人が火の燃える様子を見ている。『日次紀事』には、一一月八日の神事として稲荷社火焼が載るが、町内の行事には触れられていない。

一二月は、煤払い、正月準備の光景である。通り沿いの家で、畳を上げて畳を叩き、畳直しをし、家の内外の掃除も行われている。通りの左側を見ると、門松・裏白売り、魚等の振り売り、門付けの節季候もいる。京博寄託本のみ、第六扇の下端に、腰蓑を付けて上半身裸の男性が通りに置かれている桶の水を被る姿が描かれる。これは寒の時期の行事と思われる。

二-四-二　一人立ち獅子

京博寄託本には二種類の獅子舞が描かれる。一つは左隻第四扇の中段で、頭部に角の付いた獅子頭を被り、胸から腹部に鞨鼓を括り付けた獅子が、画面の右から左に通りを行く姿である。周囲の子どもたちは獅子を見て驚き逃げる様子で、大人たちもその様子を見ている。二つ目は左隻第五扇の中段で、鳥居の付いた長持ちを二人の男が担ぎ、その周囲に太鼓を打つ男、笛を吹く男、鼓を手にする男がいる。長持ちには担ぎ棒が通り、その前方部に鳥居を立てて神棚を表し、中央部には緑色の衣装の付いた朱色の獅子頭が置かれ、後方部に太鼓が据えられている。

この二種類の獅子舞は、元禄三年（一六九〇）の『人倫訓蒙図彙』に見られる獅子舞と代神楽に相当する[35]。同書の図では、獅子舞は後方に布の付いた獅子頭を被り、腹部に鞨鼓を括り付け、脚絆、草鞋履きで、一人だけの立ち姿で描かれる。この一人立ち獅子は、関東の民俗事例に見られる三人獅子舞の一人のみを描いたものといえる[36]。代神楽の方は九人が描かれ、獅子に入る二人、鼓、太鼓、笛等を鳴らす五人、長持ちを担ぐ二人である。長持ちには神棚を示す御幣が立ち、獅子頭を載せる場所があり、太鼓が据えられている。このように京博寄託本には二種類の獅子舞が見られるが、住吉具慶本作品群の他の諸本には代神楽はなく、一人が演じる獅子舞のみである。その描かれる位置と、向きはそれぞれに異なる。

京博寄託本に見られた二種類の獅子舞は、現行の民俗においても芸能として存在する。それには地域的な分布の違いもあり、一人立ちの獅子舞は東日本を中心に、代神楽系の獅子舞は西日本を中心に見られる。二種類の獅子舞の相違は、獅子舞を演じる人数だけでなく、獅子頭、衣装、楽器、囃子、演技など、獅子舞という芸能全体にまで及ぶ。このように根本的に違う二つの獅子舞が描かれる京博寄託本は、西日本出身の住吉具慶が江戸に出て、東日本で新たに知りえた獅子舞を描き込んだためだと考えられよう。その他の具慶本作品群には西日本系の代神楽は見えず、東日本系の一人立ち獅子舞のみが描かれた。これは、東日本の需要に応えた作品として制作されたことによると考えられる。

二-四-三　駕輿丁の衣装

京博寄託本の左隻第一扇から第三扇にかけて、後水尾天皇の行幸の行列を描く。二条城の東門の土橋には隼人の兵士、続いて堀川通に楽人、その次に天皇の乗る鳳輦がある。鳳輦を担ぐ駕輿丁の衣装は、白に近い色である。

鳳輦を担ぐ駕輿丁に注目した山口和夫氏の研究によると、駕輿丁の衣装は一八世紀半ばを境にして白張から彩色へと変化したとする[37]。つまり、天正一六年（一五八八）の後陽成天皇の聚楽第行幸、寛永三年

（一六二六）の後水尾天皇の二条城行幸、寛永一二年（一六三五）の明正天皇の禁裏から仙洞御所への行幸に際して、駕輿丁は白張を着ていた。しかし、延享四年（一七四七）の桜町天皇が禁裏から仙洞御所へ移った時には、駕輿丁は追紅狩衣だったとする。山口氏は続いて洛中洛外図を使った絵画の分析を行い、住吉具慶本作品群では京博寄託本は駕輿丁の装束が薄い黄色ないし白張であるのに対し、真野家本・武生本・歴博F本は退紅で描かれていて、白張からの改変を想定または強調した作例と考え得るとした。山口氏は文献的考察により駕輿丁の衣装の色の変化を延享年間としたが、絵画における変化も同年代とすべきかどうかは検討の余地がある。古代・中世前期の絵画において、駕輿丁の衣装は退紅色である。絵師による古画の研究の過程で駕輿丁の衣装の退紅色が再発見されたとするなら、延享年間以前にそのように描かれ始めた可能性もありうる。

住吉具慶本作品群においては、京博寄託本・芦屋市美寄託本・二川宿本・人権博本が白張で、武生本・愛媛県美寄託本・歴博F本・真野家本が退紅色である。山口氏が想定したように、駕輿丁の衣装の色により作品の前後関係を判断しえるならば、京博寄託本以下の作品と武生本以下の作品とで年代差があるということになる。

第三章　住吉具慶本洛中洛外図作品群の特徴

第一節　作品群諸本の特徴と関係性

本節では、前章でみた作品の描写内容を踏まえて、各作品の特徴をまとめる。京博寄託本は、「法眼具慶筆」の落款があり、法眼位をもつことから元禄四年（一六九一）より宝永二年（一七〇五）までの期間の制作である。金箔の貼り方、貼り札の文字の筆跡などに美的な感覚が窺われる。二条城天守閣の屋根、八月の月見、放生会、九月の菊の花などの年中行事、二種類の獅子舞など、具慶本作品群の他の作品とは異なる描写内容が随所に見られ、屏風の大きさからも、この作品が独創的なものであることが指摘できる。金砂子の雲形、年中行事の図柄等は、住吉派の技術と伝統が洛中洛外図に活かされたものと考えられる。具慶本作品群の他の作品が、この作品と同様の景観、勝手、行列、寺社の配置、祇園会の山鉾の順番を描くことから、これが基準となって他のものが作られたといえる。

芦屋市美寄託本は、金雲、描写内容、描かれた人数などの点で、この作品群の基本的な要素を兼ね備えていて、標準的な作品といえる。二川宿本は、宿場の本陣の馬場家に伝来したことが注目できる。洛中洛外図の伝来が江戸時代以前に遡って明らかなものは、上杉家伝来の上杉本、池田家伝来の林原美術館本、三条家伝来の歴博甲本など数点だけであり、その点で貴重な歴史資料といえる。上杉家等は武家・公家であるのに対し、馬場家は広義の農民身分であり、武家・公家層以外にまで享受されていたことを裏付ける点でも資料的価値が高い。描写内容では、祇園会の山鉾名を細かく書き上げる点、京都の名所の貼り札を数多く付ける点なども京博寄託本との違いである。

人権博本は、銀箔による源氏雲で、地は着彩である点が、京博寄託本・他の具慶本作品群と異なる最大の特徴である。前田・井伊家本は、現物が残らないために細部はよくわからないが、基本的な図柄を描く

標準的な作品のようである。武生本は、山の稜線を丸みをもって描く点で、京博寄託本とは異なった印象を与える。貼り札に黒と赤の輪郭をつける点も他と異なる。後水尾天皇の鳳輦を担ぐ駕輿丁の衣装が退紅色である点にも、違いが認められる。

愛媛県美寄託本は、貼り札が右隻一五ヶ所、左隻七ヶ所と極端に少ない。描かれる人数は右隻約一〇〇〇人、左隻約一一〇〇人で、この作品群の中では最も多い。年中行事のうち正月の門松などの風景が第一扇に描かれるのが他と異なる特徴である。フリーア本は、愛媛県美寄託本と同じく正月の風景が右隻第一扇に描かれる。

歴博F本は、年中行事が描かれていないことに特徴がある。理由は不明であるが、当時の絵画は依頼により制作されるものであるから、発注者側の意向と思われる。この他に、高さが約四尺であること、右隻第一扇の右下端と左隻第六扇の左下端に「法眼具慶筆（印）」という後筆の可能性の高い落款が見られることも特徴といえる。真野家本は、高さが三・五尺と小さく、祇園会の山鉾の描写は歴博F本と同じく一二基と数が少ない。

学習院大本は、現在の形態が掛幅装になっているが、本来は屏風装である。右隻第六扇のみであるため、他と比較できる要素は少ないが、基本的な仕様を兼ね備えた標準的な作品の一部といえる。

以上にみた各作品の特徴を踏まえて、その相互の関係性を見てみよう。一一点の作品を大きさで比較すると、高さ五尺五寸の京博寄託本、五尺の芦屋市美寄託本以下の八作品、四尺の歴博F本、三・五尺の真野家本とに分けられる。年中行事の配置で分けると、正月の行事を右隻第一扇に描く愛媛県美寄託本、フリーア本、右隻第二扇に描く芦屋市美寄託本、人権博本、武生本、真野家本、二川宿本、前田・井伊家本とに分けられる。後者は、門松を二組とするもの（芦屋市美寄託本、人権博本、武生本、真野家本）、一組とするもの（二川宿本、前田・井伊家本）に細分できる。後水尾天皇の鳳輦を担ぐ駕輿丁の衣装の色で分けると、白張のものは京博寄託本、芦屋市美寄託本、二川宿本、人権博本、退紅色のものは武生本、愛媛県美寄託本、歴博F本、真野家本とである。人物の配置など、細部を比較すると、愛媛県美寄託本とフリーア本との強い近似性が指摘できる。

この作品群の最初の作品である京博寄託本の右隻が現存しないことから考察の不十分さを残すが、他の要素の比較から、京博寄託本も正月の行事を第二扇に描いていた可能性が高いといえよう。その上で、京博寄託本に類似性の高いものとして、芦屋市美寄託本を上げることができる。次に近いものとして、二川宿本、人権博本を上げられる。駕輿丁の衣装からは、武生本以下の作品は新しく、愛媛県美寄託本は年中行事の配置を変えた作品、歴博F本は年中行事を描かない作品、真野家本は小型の作品であるなど、京博寄託本とそれに類似する芦屋市美寄託本からはかなり離れた内容をもつ作品になっている。

第二節　作品群全体の特徴

具慶本作品群の諸本の特徴と関係性を踏まえて、洛中洛外図の全体における住吉具慶本洛中洛外図の特徴に言及しておく。既述のように、住吉具慶本洛中洛外図は、住吉具慶が幕府の御用絵師となって以降の

一七世紀末から一八世紀初期にかけての時期の作品である。室町時代後期に制作の始まった洛中洛外図は、江戸時代前期に数多く制作されるようになり、勝興寺本、林原美術館本などの優品が作られている。その点からすると江戸時代中期の住吉具慶本は時代の降った時期の洛中洛外図と言える。

住吉具慶本とそれに類似する作品群の総数は一一点である。洛中洛外図は図柄の類似する作品の多く見られることが特徴であるが、一〇点を超えて図柄の類似するものは、この他には佛教大学本作品群が知られるだけである。佛教大学本作品群も江戸時代中期のものである。そのことから、洛中洛外図は江戸時代中期にも需要のあったこと、特定の工房により量産化されていたことが指摘できる。獅子舞等の図柄からみると、住吉具慶本作品群は江戸に拠点をおく工房の制作であり、佛教大学本作品群は京都に拠点を置いていたと考えられる。

江戸時代前期の洛中洛外図の図柄は、京都の都市の景観・賑わいの変化を追うことにあったが、江戸時代中期の作品には半世紀以前の出来事である寛永行幸が変わらずに描かれ、町並み描写も江戸時代前期の作品と大差がない。このことは粉本により制作されていたことが一つの理由ではあるが、定番化した京都像が求められていたことも要因だと思われる。

江戸時代中期の作品にはこのような傾向が見られるが、その中で住吉具慶本作品群の特徴は、年中行事を月順に描き込んだ点にある。これは、行事絵などを得手とした土佐派の系譜を引く住吉派という絵師の流派に起因するものであるが、実際には具慶による古典等の研究と、絵の創作意欲とから実現したものと思われ、洛中洛外図の作品全体の中でも特筆できる事項といえる。

終　章

第一節　研究の結論

本稿では江戸時代中期の住吉具慶が制作したとされる作品及び類似の作品を取り上げ、その特徴を指摘することを第一の目的とした。最後に、改めて全体に関するまとめを行う。

第一章では、住吉具慶本洛中洛外図の資料紹介を行った。「法眼具慶筆」の落款をもつ京博寄託本を紹介し、落款から元禄四年（一六九一）一二月から宝永二年（一七〇五）四月までの期間の作品と考えられること、作品全体から受ける印象は優雅で穏やかであることから具慶筆の可能性が高いことを述べた。次いで、具慶に関する研究を紐解き、具慶は幕府御用絵師として活躍したこと、洛中洛外図屏風・巻子の作品を描いたとする記録のあること、将軍徳川綱吉の好みにより洛中洛外図を描いたとする伝承のあることを述べた。その上で、描写の類似する作品一〇点に関し基礎的な作品情報を提示した。

第二章では、具慶本作品群について、絵画・地理・歴史・民俗的要素について分析・考察を行った。絵画的要素では、金砂子による装飾的な雲形、銀箔の雲形をもつ作品に注目した。貼り札については、貼り札に装飾のある作品があること、寺社名の違いを図ではなく貼り札で示すものがあることを指摘した。地理的要素では、右隻に鞍馬寺、上賀茂神社が含まれていること、左隻には岩屋寺から八幡、大徳寺か

ら東寺までを含むことをみた。表示地点としては、同じ絵柄について異なる寺社名の表示されているものがあること、寺社名には当時の地図や出版物の知識が参照されている可能性のあることを見た。歴史的要素では、二条城の本丸が詳しく描かれていることを指摘した。民俗的要素では、正月から師走までの年中行事が右隻の右側から左隻の左側へ順を追って描かれていること、関東に見られる一人立ち獅子舞を描くこと、そのことから江戸で制作されたと考えられること、鳳輦を担ぐ駕輿丁の衣装に白張と退紅色の二種類があることなどをみた。

第三章では、具慶本作品群の特徴を作品ごとにまとめ、京博寄託本を基本にして他の作品群が作られていること、描写内容により小群に分けられること等を指摘した。その上で、住吉具慶本作品群は江戸時代中期の作品としての特徴を持っていることを指摘した。

今後の課題としては、資料の更なる発見、資料相互の詳細な比較による作品相互の関係性の追求、全体での位置付けの考察をさらに深めたいと考える。

〔注〕

(1) 先行研究については、藤原重雄「『洛中洛外図屏風』関係文献目録」(『第二定型洛中洛外図屏風の総合的研究』、科学研究費研究成果報告書、二〇〇五年)、藤原重雄「『洛中洛外図屏風』関係文献目録(Ⅱ)」(『中近世風俗画の高精細デジタル画像化と絵画史料学的研究』、科学研究費研究成果報告書、二〇一〇年)が詳しいので参照願いたい。

(2) 京都国立博物館編『洛中洛外図』(武田恒夫執筆、角川書店、一九六六年)。

(3) 山根有三『日本の美術一七　桃山の風俗画』(平凡社、一九六七年)。小沢弘「洛中洛外図屏風の研究」(『浮世絵芸術』第四五号、一九七五年)。辻惟雄『日本の美術一二一　洛中洛外図』(至文堂、一九七六年)。

(4) 京都国立博物館編『洛中洛外図　都の形象―洛中洛外の世界』(狩野博幸執筆、淡交社、一九九六年)。

(5) 内藤昌「近世洛中洛外図屏風の景観類型」(『国華』第九五九号、一九七三年)。

(6) 片岡肇「洛中洛外図屏風の類型について(一)」(『京都文化博物館研究紀要　朱雀』第九集、一九九七年)。

(7) 水本邦彦「洛中洛外図の中の京都」(『新しい歴史学のために』第二二九号、京都民科歴史部会、一九九八年。後に、水本邦彦『絵図と景観の近世』、校倉書房、二〇〇二年)。

(8) 大塚活美「江戸時代の洛中洛外図の主題と構図について」(『歴史評論』第六二一号、二〇〇二年)。

(9) 大澤泉・加藤裕美子「第二定型本諸本の分類における基礎的考察―ランドマークの比較を中心に―」(注(1)『第二定型洛中洛外図屏風の総合的研究』)。

(10) 江戸時代中期の作品に言及した研究としては、武田恒夫「洛中洛外図の行方」(『古美術』第八八号、三彩社、一九八八年)。

(11) 注(4)前掲書、図版二六。

(12) 土居次義「如慶と具慶」(『江戸のやまと絵―住吉如慶・具慶―』、サントリー美術館、一九八五年)。「常憲院殿御実紀」(『新訂増補国史大系　徳川実紀』)。

(13) 下原美保「住吉如慶・具慶によるやまと絵制作について」(『鹿児島大学教育学部研究紀要　人文・社会科学編』第六〇巻、二〇〇九年)の一覧表、及び注(12)の年表による。

(14) 下原美保「住吉派興隆と天台宗との関係について」(『鹿児島大学教育学部研究紀要　人文・社会科学編』第五九巻、二〇〇八年)。

(15) 赤澤真理『源氏物語絵にみる近世上流住宅史論』(中央公論美術出版、

二〇一〇年）。
(16) 榊原悟「住吉具慶筆『都鄙図』解題」（『古美術』第八八号、三彩社、一九八八年）。
(17)『訂正増補考古画譜』巻第一一（『黒川真頼全集』第二、一九一〇年）。
(18) 注(16)論文の注6。
(19)「常憲院殿御実紀」巻八（『徳川実記』所収）。
(20) 芦屋市美寄託本は、二〇〇九年春、二〇一〇年夏に同館で展示された。「巷・ちまた・のコレクション」展（二〇一〇年七月）チラシに載る。寸法は、展示品からの推測。
(21)『大名の宿本陣展』（豊橋市二川宿本陣資料館、一九九四年）。
(22)『季刊・リバティ』第一九号（大阪人権博物館、一九九七年）。
(23)『日本屏風絵集成』別巻（講談社、一九八一年）。
(24)『京の息吹き』（越前市武生公会堂記念館、二〇〇八年）。山口和夫「寛永三年二条城行幸行列が描かれた「洛中洛外図屏風」―越前市武生公会堂記念館本について―」（『東京大学史料編纂所附属画像史料解析センター通信』第三六号、二〇〇七年）。
(25) 二〇〇八年秋に愛媛県美術館で展示された。
(26)『日本屏風絵集成』第一一巻（講談社、一九七八年）。
(27) 注(4)前掲書。
(28) 注(10)論文。『八幡正法寺の絵画と書跡』（京都府立山城郷土資料館、一九八七年）。
(29)『ミュージアム・レター』№一七（学習院大学史料館、二〇一一年）。
(30) 所広秋「光明寺所蔵『洛中洛外図屏風』について」（『岐阜市歴史博物館　研究紀要』第一二号、一九九八年）。
(31)『大日本史料』第十二編之二十四所収。『蜂須賀家文書』（山口和夫「近世の目録に記された屏風について」、『（東京大学）画像史料解析センター通信』第四一号、二〇〇八年）。
(32)『歴史群像　名城シリーズ一一　二条城』（学習研究社、一九九六年）。
(33) 藤岡通夫『京都御所〔新訂〕』（中央公論美術出版、一九八七年）。
(34)『江戸時代の門松』（名古屋市博物館、一九九四年）。
(35)『人倫訓蒙図彙』（東洋文庫五一九、一九九〇年）。
(36) 笹原亮二「三匹獅子舞」（『日本民俗大辞典』上、吉川弘文館、一九九九年）。
(37) 山口和夫「江戸時代『洛中洛外図屏風』の景観・制作年代についての一考察―行幸行列・鳳輦・駕輿丁装束を中心に―」（『（東京大学）画像史料解析センター通信』第四三号、二〇〇八年）。

追記：本稿を投稿後、住吉具慶本作品群に相当する作品一点が新たに紹介された（個人蔵、六曲一双。大倉集古館編『描かれた都』、東京大学出版会、二〇一三年）。図版を見る限り、真野家本に近い作品と思われる。

（おおつか　かつみ　文学研究科日本史学専攻修士課程修了）
（指導教員：渡邊　秀一　教授）

二〇一三年九月二十七日受理